



東九州支部報



忘年登山会 (12月15日鶴見山頂にて)

の水面が光つてやや大きく見える。
南平台への分岐で小休止、さらにその後もう一度小休止して九時五〇分山頂へ到着。冷たい強風の中、声をかけると先行していたパーティが待っている。風が強い

の水面が光つてやや大きく見える。
南平台への分岐で小休止、さらにその後もう一度小休止して九時五〇分山頂へ到着。冷たい強風の中、声をかけると先行していたパーティが待っている。風が強い

御嶽権現火男火売(ほのおほのめ)神社にて小休止で、ここであらためて重廣さんより一言今日のあいさつ。そして出発、登りにかかる。やや風の強い状況だが天候はくずれる心配もない。先行した女性パーティを追いかけられるようにして快調に登る。山頂部が見えてくるにつれて、白く氷結した樹木が見えてくる。見おろすと志高湖の水面が光つてやや大きく見える。

鶴見岳から伽藍岳へ縦走

忘年会を兼ねた恒例の関西支部長・重廣恒夫さんとの登山会が今年も十二月十五日(土)十六日(日)に鶴見山系で行われた。十五日の早朝、前日大分入りしていた重廣さんより一足早くサニーを出発(六時四十分頃)。高速道路経由別府へおりて一般道を鶴見岳登山口の上の駐車場へ。ここで同乗の女性三人を降ろして、後続の車を待つ二台で今日の下山地である塚原温泉入口へ急ぐ。そこには打ち合わせ時間どおり星子さんが待っていた。車二台を置いてすぐに鶴見登山口の駐車場へ戻る。ここで待つこと約十分、重廣さんを始め一六名全員が揃い、軽く準備体操をして出発。八時ちよつと過ぎた。

今年も重廣さんと一緒に

忘年登山と忘年会

加藤英彦

《 も く じ 》

忘年登山と忘年会	1
特別企画「新春対談」	3
マッキンレー山行報告①	5
熊ヶ岳(来浦富士)他	7
たかが600m	7
先達を語る④「永井清一氏」	9
今秋の登山	10
クラブ紹介⑥「高登研」	10
私の無名山ガイドブック 32	11
叙勲のお祝い	12
お知らせ	12
後記	12
バックナンバー	13

で、挨拶もそこそこに風の中での記念写真の撮影。「チャレンジ四〇〇〇」と書かれた大きな横断幕を前にして全員が並ぶと、数台のカメラの放列だ。

ここで女性三人はロープウェーにて下り、今夜の宿湯布院へ向うと言うので、残りの十六名にて山頂登。標高千二百〇千三百メートル付近からは白く霧氷ができていて、向いから吹き付ける強い風の中、馬の背へと下っていく。対岸の由布山も同じように上部の方が白くなっている。

直線状に白く見える鞍ヶ戸のI峰登り、向かって右側(東側)の斜面が崩壊しており、新しいルートが直ぐ左側をとるように作られており、上部は梯子で固定されている。II峰をすぎ、風が強いのでIII峰(三角点)をやり過ぎ、花の台へと下っていくが、この下りでは強烈に風をうける。耳が冷たくなっていくのがわかるほどだ。

急いで下り風除けの樹林帯に入りほっとし、小休止。船底への最後の下りは船底新道をとらずに以前からの滑りやすい急斜面を注意して下る。船底到着十一時二十五分、風の当たらぬスキの道端にて昼食をとる。

昼食後すぐに内山への急登にかかる。こども山頂にて「チャレンジ四〇〇〇」の旗を出して記念撮影だ。内山をあとに塚原越めざして下る。風は相変わらず吹いているが、高度を下げるにつれ、やや弱まった感じだ。塚原越えより加

(内山山頂にて)



藍岳へはピストンする。伽藍岳山頂より振り返ると、今歩いてきた鶴見山頂付近は相変わらず風が強くて白い霧氷は朝のままだ。

山頂は風が強いので、写真撮影をしたらすぐに下山。塚原着一四時一五分。鶴見登山口に車を取りに行く組(運転手七名)は出発。残ったものは塚原温泉に入浴して待つてもらおう。スムーズに移動し車を回収して塚原温泉へ廻りそこで温泉入浴組を乗せ今夜の宿の由布院温泉の本文理大学湯布院研修所へ回る。

コースタイム
大分発のち 塚原(車置き)1:30
戻り全員揃い8:55出発 火男火売

神社8:15 南平台別れ8:30 ロープウェー別れ9:38 山頂9:55
10:08出発 鞍ヶ戸10:35 花の台10:52 船底12:00(昼食12:30)内
山12:40 塚原越13:14 伽藍岳13:35 塚原温泉14:15 湯布院へ15:50

忘年会

神社8:15 南平台別れ8:30 ロープウェーの報告には全員から祝いの拍手が響く。八時三十分万歳で終了。二次会は別室にて十時まで続いたようだ。



夜六時から日本文理大学湯布院研修所食堂にて忘年会。司会西さんの冒頭の挨拶。梅木支部長からの挨拶。そして重廣氏より近況の山を続けていて、現在まで八百五十報告あり。「チャレンジ四〇〇〇」十くらい登った。全国の仲間とチャレンジを続けていきたい」とのことだ。そして宴に入る。宴はけなわとなったころ、参加者より一言近況報告、自己紹介の時間となる。

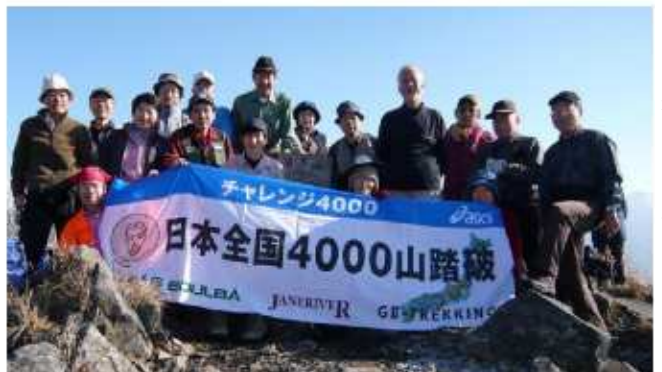
福万山・平家山

翌日(一六日)、出発前に重廣さんの「お土産」として恒例となったTシャツとチャレンジ4000のポスターを頂く。「毎回ありがとうございます、重廣さん」今日合流の三人を含めてすぐに道の駅湯布院に集合。ここで車をまとめて分乗して福万山の登山口へ。東急別荘地のゴルフ場整備棟の横の空き地に駐車。

重廣さんの指導にて入念に準備体操をして出発。西側スポーツセンターよりのルートをとり登りにかかる。今日は女性も入ったのでゆっくりペースで先頭を重廣さんにとつてもらおう。昨日の強風は収まったようだ。天候も安定してくる。のんびり雑談もはずみながらの登りなので、汗をかく間もなく山頂へ。

好天のもとしばしの景観を楽しみ、北九州支部から参加の日向さん持参のシャンペンでみんな乾杯。そしてチャレンジ四〇〇〇旗を出して、全員での撮影会。下りは直登ルートをとり難なく下山。ここから次の目的地平家山を目指す。途中道の駅湯布院にて昼弁当を買出し林道へと入る。ゲートを開けて峠まで車で入れたので、ここから平家山山頂へは

(福万山にて)



一ピッチ四十分に到着した。登りの道は落葉がかさかさ音を立ててやさしい登路であった。

山頂で昼食をとり、今回最後の記念撮影をして最後の万歳を下る。来年の話を持ち出したらどこでもOKとの事で、予定では豊後水道に面した元越から北へ彦岳鎮南山そして樅木山と四山を、そして宿泊はちよつと贅沢な白杵のふぐ料理はどうですかと約束して、道の駅から空港へ送る重廣車を見送り解散した。楽しい二日間の山行であった。

コースタイム
8:00宿泊発 8:17道の駅湯布院発

ゴルフ場登山口発着:35 福万山 13:25下山 13:30分かれる 小竹、西(あ)、後藤、星子、八川(旦那さん)下川(智)、遠江、佐藤(秀)、(忘年会のみ参加)
 頂着10:30~10:20発 11:05下山 参加者:重廣、西(孝)、飯田、重、園田(他会員外四名) (以上
 車で移動 11:50平家山登山口の 加藤、石川、中野、久保(以上二 一五日のみ参加)
 峠へ 12:20山頂へ 12:53山頂発 日間参加) 菅、安部、牧野、松村、菊田、下梅木、安藤(幹)、安藤(せ)、
 日向、岐部(十六日のみ参加)

支部報発行四〇号記念特別企画

新春対談 「山登りの楽しさを語る」

重廣恒夫VS梅木秀徳支部長

司会者:西 あずさ

司会者:新年おめでとうございます。本日は支部報発行四〇号記念の特別企画として、東九州支部ではすでにおなじみの登山家の重廣恒夫さんと、梅木秀徳支部長にお話をお聴きすることになりました。重廣さんは、日本山岳会関西支部の支部長もなさっておられます。テーマは「山登りの楽しさ」ということで、これからお二人の山登りにかわる思い入れなどについて語って頂きたいと思ひます。まずは、お二人が山に登り始めたきっかけや、その後の主な登山歴などについてお話を伺ひます。まずは重廣さんから。



重廣:子どもの頃の昆虫採集あたりがきっかけで自然と接する機会が増えました。中学二年のときに「処女峰アンナプルナ」を読んで山にあらがれて、岩登りの真似事をしてりして、これがきっかけと動機づけになったと思ひます。叔父が山登りをしていて、黒四ダムが出来る前の黒部の写真などを見せてもらったり、一緒に山に連れて行ってもらったりして感化されていったというところもあります。高校時代に徳山山岳会(山口県)に入り、ここは岩登りが盛んな会で、一緒に行動する中で本格的になっていきました。なぜ岩登りにのめり込んだかというところ、当時は、ヒマラヤに行くにはヨーロッパアルプスの三大北壁を登らなければならない。これを登ればチャンスも来るという当時の流れでした。岡山の大学に入り、そこに大倉大八氏(日本人初のアイガー北壁登頂者)所属のクライマークラブがあり、これに入りました。山小屋でアルバイトをしたりしながら、山に行く資金を造り、岩登



りや厳冬の黒部などでトレッキングをしていったのです。司会:私が幼い頃に山小屋で重廣さんと会ったという話には、その大学時代のアルバイトの中のこと?

重廣:そうですね。西穂高山荘でアルバイト中のことでしたね。

司会:海外の山へのきっかけは?

重廣:私の入っていたクラブは会員十数名と、小さかったのですが、他のクラブと合同で行動することも多く、そんな中で長谷川恒夫と一緒に、そのころ最も難しいと言われていた厳冬の南アルプスの赤石沢を詰めて甲斐駒ヶ岳を成功させたこともありました。ある時、酒沢で岩登り集会があり、講師の一人として誘われたことなどがありましたね。当時は東京以外にも、地方に沢山のクラブが互いに切磋琢磨して、みな、ヨーロッパの三大北壁からヒマラヤへという夢を持っていたので、多くが高い登山技術を積み上げていったのです。

司会:で、最初に海外の山へ行ったのは?

重廣:最初が一九七三年のエベレストでした。

司会:いきなりエベレストですか?

重廣:はい、何故かというところ、私の属していたクラブは小さいので、いろいろな人と組んで、特に冬は近藤邦彦(今、日本で最も優秀なガイドの一人だが)と組んで山をやったりしていました。そして、多くはヨーロッパの三大北壁へ出かけていきましたが、私は大学を出て就職しました。就職すると日曜日に近くの岩登りのゲレンデぐらいしか行けなくなる。ところが、入社する年湯浅道男さんから「エベレストに行かないか」と誘いの声がかかってきました。しかし入社早々の自分は会社に言うことを躊躇して、その暮れのクリスマスパーティーで鬼塚喜八郎(アシックス創業者)社長より「ヒマラヤに行くような話があれば言い出せささい」と言われ、すでにエベレストに誘われていたが、そのときには言い出せず「クリスマス直後に、エベレストに誘われました」「会社が大めと言ったらどうする」「やめます」「なら言うて来い」こうして、一九七三年初めての海外遠征でエベレスト(南西壁)に行くこととなったわけです。私は先発隊としてネパ

ールに入りました。先発隊は荷物の陸送やベースキャンプまでの偵察などを主な仕事としました。ヤマヒルに悩まされたり、泥棒に注意したりいろいろ思い出があります。その後七六年に鹿野勝彦さんから誘われてナンダデヴィへ行くことになりました。道具も、それまで日本隊が使っていた八本爪アイゼンでは、ナンダデヴィ縦走は無理だと鹿野さんに言われ、一二本爪を使うようになります。そうしてその後、七九年K2、八〇年エベレスト（北壁）、八四年カンチエンジュンガ、八八年日中ネのエベレスト交差縦走と海外遠征が続く。こうした山の体験は、湯浅さんから声をかけられたり、鬼塚社長の理解が無ければ実現しなかったことかもしれないね。司会…そうですね、仕事をしながら山に行くとしたら会社の理解が必要ですね。そういう意味では支部長も、会社やいろんな人との出会いがあったようですが、では支部長お願いします。



梅木…私は玖珠の飯田の生まれなので、山に囲まれて育ち、子供の頃の遠足で近くの山を歩き始めました。小学校二年生で大戦が始まり、六年生で終戦を迎え、その後の食糧難で体力が落ちて、一時結核になりかけ、療養のために近くの山を歩き回ったりしましたが、遠くに見える九重の山に登ってみたいというような気持ちで芽生えてきました。ちょうどそのころ、一九四八年第三回福岡国体の山岳競技が九重山系で開催されて、生家の近くをたくさんの登山者が通り過ぎていき、それに興味が増して翌年高校入学とともに山岳部に入部しました。当時は岩登りの指導者がいないため、本を見ながらザイルワークしていましたが、加藤数功さんと知り合い、岩登りを見せてもらうことになりました。高校では第五回名古屋国体が鈴鹿で開催されてオープン参加しました。九大山岳部に入部したときに父親がタカハシの登山靴を買ってくれたのがうれしかったが、二、三年で履きつぶすほど山に入っていました。そのころ福岡山の会からヒマラヤ行きの話が出ました。山に二〇〇日、アルバイト一〇〇日、学生運動一〇〇日、勉強六五日の学生生活を送っていました。その後新聞社に入社

大分合同新聞社と宮崎日々新聞社との合同企画で、傾山から大崩山まで完全縦走しましたが、当時、このルートは開かれて無かったのです。一九六四年、大分山の会が台湾登山と台湾一周する（大分県初の海外登山）。このころ、大分からもヒマラヤに行こうと言う機運が芽生え、加藤さんの発案で大分ヒマラヤ研究会発足するが、ヒマラヤなかなか許可が下りません。そこで深田久弥さんに相談したら、「いい山がある」ということで、一九六五年、日本人がまだ足を踏み入れたことの無いヒンズークシ・コーイーモンデューに登頂成功しました。これが日本山岳会大分支部の初の海外遠征で、帰県したら、知事の提案でトキハ前でパレードをしてくれたのです。司会…はい、有り難うございます。次に、近年の山は中高年の登山ブームで、また中

高年の事故も増えていますが、こうした状況について提言などがありましたらお願いします。



重廣…一九六一年から山での遭難が増加傾向にあります。以前の遭難と言えば、雪崩

だとか、岩登りでの事故が多かったが、ここ十数年は道に迷ったり、転んだりする軽微なことが原因の遭難が増えています。何故そんな事故が多いかと言えば、自然を甘く見ているからだと思うのです。高度成長時代に入り、身体を使わない生活が広がり、一方では仕事に追われ、家庭では女性も外で働き、その結果、中高年になって癒しを求めるために山に出かける人たちが多くなりました。しかし、そういう人たちは基本的体力とかがつげずに、若いころの気持ちのまま山にはいる。本来は体力をたくわえて、知識を集中して、技術を高めて山に登るといのが正しいのでありますが、そのような準備が出来ないので装備に金をかけるとか、ツアーに参加するとか、基本から離れた方向に行つて、それが事故につながっていると思うのです。そこに百名山ブームのように、一極集中的な流れもあり、出来上がった企画に乗って山行する人や「連れて行つてもらおう」型の、中高年になってから山に登り始める人たちの増加が大きな問題となっています。そのうえ、そういった人たちが狙ったツアー登山が横行し、コストダウンのために長いルートや難しいルートは敬遠され、最短ルートに登山者が集中する、そういう傾向にあります。そこで『チャレンジ四〇〇〇』と銘打ち、自分で計画する喜びを感じませんか？自然と向き合いながら目標を達成してみませんか？身近なところから一歩一歩歩いてみませんか？地図を見れば無限の目標ができますよ！といった呼びかけをしようと思つて企画したわけです。

梅木…中高年の人たちは、高度成長からバブルの時代へと、エコノミックアニマルで働きつづけてきた。こうした人たちが今たくさん山に出かけています。中高年登山者には三つのタイプがあると思うのです。一つは若い頃から山登りをずっと続けている人、二つ目は中高年になって始めた人、三つ目は若い頃やつていて、仕事などで中断して中高年になって再開した人。二つ目の人たちは謙虚だが、三つ目の人たちは、若い頃の感覚が残っていて、自分に過信しているのが危ない。私は、バス会社とタイアップして初心者と中断していた人たちのために「健康作りハイキング」を始めました。参加者は多かったのですが、自分たちで計画を立てない、連れて行つてもらおう旅行気分が山登りをする人が多くなりました。そこで、自分たちで計画を立てましょう、自分たちで行きましょうということ、大分県登山会を設立しました。だんだん自主的に山行するようになったようです。支部に会友制度をつくつたのも、このために役立つと思つたが、今では正会員以上の人数になって、山を

楽しんでいきます。中・高年登山が百名山に集中していることや、大分百名山に載せるとそこに登山者が集まるが、載せないと誰も登らなくなるという現象があるのは残念です。自分の力で安全に楽しく山に登るといふ心がけを基本にしなければなりません。

司会…一方では、若い人たちの山離れが言われていますが、これに対する考えや提言などがありましたらお願いします。

重廣…私が感じるのが、自ら目的をつくってそれに挑戦するという姿が減ってきているということですね。若い人をどのように山に誘うかと言うことですが、私はボランティアで小中学生に話しをする機会があるが、今の子供には自然と親しむ機会が少ないし、山ガキ、川ガキといった遊び方が無くなっている、そういう面の環境作りを進めたいと考えています。また、大学生などにヒマラヤの魅力伝え、挑戦させてみることも考えています。しかし単なる援助では卒業旅行になるので、自らの意志で目標を持つように学生同士で声を掛け合う機運を創る必要があると考えています。このため関西支部には大学の山岳部を中心にした青年部を作ろうという動きがあり、OBがそれをバックアップする体制作りを考えているわけです。

梅木…子供が自然に接する機会が少なくなっていますね。大人もそうで、そのうえ大人が子供の自然との接触を妨げている現象もあります。学校、高校の山岳部の先生を中心に高校生に山の楽しさを広げようとしています。高校の先生に山の経験者が減り、指導者が少なかったり、山岳部が無かったり、また



事故の際の引率責任を問われるため生徒を山に連れて行かないと言いう状況にあります。そして、若者はいわゆる3Kを毛嫌いする傾向が強く、楽で手近で無理のない遊びを求めて、冒険や探検などは興味を示しません。指導者を広げていくことが求められています。

重廣…指導者の減少というのが大きい要因ですね。大学でも山岳部が減っています。特に引率責任を問われ始めて、自然には手を出しにくい面が見られます。学校の山登り遠足も、だんだん難しいところを避け、短い距離になり、ついには取りやめるところが多くなっています。親が山登りなどさせるのに反対する。まずまず子どもたちの体力不足が広がることが懸念されます。もつと、子供や若者に、自然と接して、自然に触れる機会を我々が広げる努力が必要ですね。

梅木…山登りの楽しさ、山で得られる感動を広げたいですね。司会…最後にチャレンジ四〇〇〇のPRとこれからの活動について一言お願いします。重廣…自然と接する時間が短くなっています。チャレンジ四〇〇〇は自然の中を歩きますか？という素朴なメッセージを込めています。四〇〇〇山登れるかどうかはわかりませんが、わずかに数メートルの山もあるのです。「低いから登ろうか」という人も出てきて、百名山に集中していた人たちがバラけるのではないかと期待をしています。山登りの楽しみは、自ら計画を立てることにあるのです。目的の山を選び、そこに到達するための計画を作り、体力や技術を身につけ、それを実現させるというプロセスを経てこそ達成感につながります。喜びを感じながら自然の中を歩くということを、よりたくさんの人と味わいたいと考えています。

司会…本日はどうも有り難うございました。

(文責 西あずさ)

支部報四〇号を記念するように、星子会員から長大な山行報告を頂きました。「マッキンレイ」です。2005年にマッキンレイ登頂史上最高齢記録をうちたてた、同会員の山行報告を三回に分けて連載します。

マッキンレイ(6194m)

山行報告①

星子貞夫

期日:2005-05-29 ~ 07-03

隊名:マウンテン・ゴリラ マツ

キンレイ2005登山隊 隊長 安村淳

メンバー隊長外5名

登攀:田中、星子、川島、猪野、

撮影:李代

山城:マッキンレイ(6194m)

コースウエスト・パットレス

アラスカの北緯63度05分、

西経151度、高度6194m、先

住民の言葉で「デナリ」と呼ばれ崇め

られている山、マッキンレイはア

ラスカ山脈にあり、北米大陸最高

峰として登山家にとっては憧れと畏敬の山である。はジャパニズ・カリブーと呼ばれて有名になっている。いつかこの山に登りたいと心に温めていて、3年前に挑戦したが体調を壊してアンカレッジからそのまま日本に帰った。年齢的にも限界に達したので捲土重来を期して再度挑戦した。

5月29日 機中泊

暗い空に下弦の月。次第に明るくなっていく空。流れる車窓の景色は朝焼けの薄雲。見送りの人を

近年大分県日田市出身の栗秋正寿氏が冬季登山に成功し、現地で

(ウエストバットレスコース全景)



ホテルで先発の隊員と初対面の挨拶をし、中華バイキングの店で成功を祈る。

5月30日 アンカレッジ泊

ダウン・タウンを散歩して、午後美術館を見学する。

5月31日 タルキートナーのホテル、ラチチュード62泊。

8時30分に予約していたシャトル・トレイラーで、マツキンレイの登山口のタルキートナーに向う。アラスカ鉄道と平行してハイウェイを走り、途中ワシラと言う町のスーパーで買い物をして10時30分にタルキートナーに着く。248、6キロで私個人が63キロであった。



タルキートナー

一日の始まりである。テントはアタック時を除いてすべて個人テントである。設営も撤収も炊事もすべて一人でやる。登行する時だけが全員がザイルに繋がって歩く。誰も手伝って呉れないし、誰の手伝いもしない。自分だけの事で精一杯の登山である。自分の事をきちんとやれると言う事がメンバーに対する最大の奉仕である。

6月2日 2075m泊

曇後晴れ。一部の食糧をDPにデポして軽量化を図る。ルートには一本のトレースが図られている。まず飛行場となった氷河を下り、本流のカヒルトナ氷河と合流し、この氷河をカヒルトナ・パスまで遡行する。

6月3日 2700m晴

0時30分に起床。気圧は730mmHg、ホーレイカ山の朝焼けが綺麗だった。朝食をすましテントを撤収しソリの荷造りを終えて4時にスタートする。次第に傾斜がきつくなり、背中の荷物と腰にかかるソリの引っ張りで苦しい。むしろだザイルはさほど気にならない。11時に2700m地点に平地があり、テントを設営する。明日は4時出発、21時頃から吹雪となる。

6月4日 停滞

午前4時出発の予定で準備をしていたが吹雪が止まず、2時10分に停滞する旨の通達が有り、履いていた靴をぬいでシュラフに潜る。8時頃より風が少し弱まったが結局翌日の朝まで続いた。

6月5日 3230m デポ・キ

残して一人でアラスカの地に旅立つ心はカラッポ。カラッポの魔法(大久保由美)とは良く言ったものだ。カラッポだから何でも入ってくる。染み込んで来る。旅は普段の雑把な心を空にし、新鮮な水を、湧き水を心に染み込ませて呉れる。

体の何処にも不調はない。アコンカグアでの経験を生かして、あせらず、力まず、粘り強く、最後まで諦めずにやり抜く決意を固める。



シャトル・トレイラー

福岡空港で荷物31キロ、30キロの二個を預け、機内持込8キロを担ぎ中華航空に乗り込む。アラスカはこれで3度目の旅だ。アメリカ先住民のイロコイ族「一万年の旅路」の情景が心に浮かぶ。5月29日 アンカレッジ泊

空港で安村隊長の出迎えを受け、少し重過ぎるので10キロ位減らして再度荷造りをやり直す。食糧の素材が重すぎた。α米や乾燥野菜などを多用すべきであった。いよいよ明日山に向けて出発だ。モーター、ラチチュード62の食堂で期待と不安の晩餐会をする。6月1日 LP(ランディング・ポ

イント泊 マツキンレイの登山はタルキートナーから小型飛行機で氷河に着陸することから始まる。小型飛行機の着陸する氷河の地点をランディング・ポイントと呼んでいる。朝からどんよりとした天気、10時に飛行場に集合したが一向にフライトが始まる様子がない。天気次第では今日は飛ばないかも知れない。有視界飛行で飛ぶセスナには時刻表は無い。すべてはお天気次第である。すべてはおスナに運ぶよう指示がある。パイロットと登山者4人とその荷物を乗せる単発のソリ付のセスナに急いで自分の荷物を運ぶ。約1時間のフライトでLPに着陸する。突如の発着に慌てていて、マットとスコップの柄を飛行場に忘れてしまった。ソリの調達や忘れ物で少しパニックになったが、先ずは第

この氷河上に無数のクレバス(氷の裂け目)が潜んでいる。大きく開いたクレバスは目視で避けることが出来るが、少し狭くて雪を被ったクレバスに踏み込むと危険である。此れをヒドン・クレバスと言う。全員が15mの間隔でザイルを結び互いに安全を確保しながら歩いて、この事をアンザイレにして歩くと言っている。7時に出発し、初めて履くスノーシューや慣れないソリの操作でまごつきながら12時まで歩き2075mの地点でキャンプする。担ぐ荷物とソリに乗せる荷物の割合には要領がある。傾斜が比較的ゆるやかな氷河地帯は担ぐ荷を軽くして、傾斜が急なコースや氷



アンザイレ

キャンプ手前泊 快晴

午前3時の出発予定であったが吹雪が明け方まで続いた。7時に出発しカヒルトナ・パスの基部まで詰めて、直角に右に折れデポ・キャンプに向う。暑い一日である。デポ・キャンプにむかつて益々傾斜が増してくる。15時にデポ・キャンプの手前2時間位の3230mにテントを設営する。

月例山行報告

熊ヶ岳(来浦富士)赤根山、狩場

(十一月月例山行)

岐部 威吉

十一月二十五日(晴) 五時三十分に、バス停で久保さんと待ち合わせて、久保さんの車に乗込みサニースポーツに向かう。車中の話題はつい最近起きた北海道の遭難事故の話になり、彼らも出発の時には事故など想定外であったに違いないと思い、自分たちも身の引き締まる思い。
今日のメンバーは西さん、飯田さん、中野さん、安部さん、久保さん、宮本さんと私。総勢七人。

飯田さんは別府、宮本さんは山香で合流。例によりコンビニに寄り昼食の仕入れ。私はこっそりと西さんの視線を避けながらビールを購入。
一路国東へスピードアップ。本日の目標は熊ヶ岳五二七メートル、赤根山四五三メートル、狩場山五百メートル。まず熊ヶ岳へ。これが今日の主目的で別名が来浦富士。七時四十分に登山口の水谷峠に着。

八時ちようど、峠からスギ林に入り、右に左に倒木を避けながら山腹を登り稜線に出る。今年は登山客が少ないのか、あまり人の来た気配が感じられないので、少し嬉しくなる。
少し遅かったのか、目をみはるような紅葉は感じられなかった。約一時間で熊ヶ岳山頂に到着。やたらと大きな岩の多い山だった。一〇時に峠に下山。



熊ヶ岳にて

次の赤根山は民家の脇から林道を車で入り、途中に駐車。一〇時三〇分に登山開始。前の熊ヶ岳と同じように登山客の気配があまり感じられなかった。古い道を上り熊ヶ岳との鞍部の峠にでた。ここに猪のお風呂(ヌタ場)らしいものが二カ所あった。珍しいので非常に印象に残っている。できれば猪の入浴シーンを見たいものだ。
鞍部から急斜面の稜線を登り、約四十分で山頂にたどり着いた。頂上からの眺めを期待していたのだが樹々が茂り見通しがいいものではなかった。
(赤根山にて)



さて次は本日の三つ目の目的の狩場山だ。赤根温泉から夷谷温泉に通じる道路を上り、峠付近に車を止める。十一時五十分登山開始。急な山腹を直登して稜線に出て、三つのピークを越えて登山口から約五〇分で三角点のある山頂

に到着。こちらの山もそれぞれ紅葉の具合はかわりばえがしなかった。いささか期待はずれの感がなきにしもあらず。
さていよいよここで昼食。渴いたのどにビールがうまい。他の方々も一斉にコンビニ弁当をひるげた。昼食の後さらにその奥にあるという山頂に向かう。その途中に木立が開けて、日の光が眩しく入ってきて、眺めが良く気分がいい場所に出た。昼飯をとったせいか、みなさんいい笑顔だ。三角点から少し下がって登ったところが山頂で、ほんの三、四分だ。展望はまったくない。



(狩場山にて)

下山途中六十歳過ぎぐらいの一人の登山者に出会う。西さんが声をかけた。「どちらからですか?」「私は国東町で地元の方ですが、この狩場山には登ったことがないので今日は初挑戦です」と照れくさそうにこたえた。意外と地元の人にはこんなものだろうなとつくづく思った。国東は仏の里と言われているが、なるほど、ほっとけない山だ。

たかが六百メートル

花尾山(渋木富士) 609m
一位ガ岳(長州富士・豊田富士) 672m・鬼ヶ城 619.6m
竜王 613.9m

(十二月月例山行)

西 あずさ

山口県の山は重慶さんと行った寂地山しか知りませんでした。樹林の中がよく整備された登山道で、山頂も木漏れ日の中でした。
そんな印象を抱いたまま、安部先生の「しし鍋するけんな! なあんも持ってこんでいいで!」この一言に誘われて、のこのこと出かけていきました。
しし鍋が目的の私は、登山者にあるまじき参加の仕方をしてしまいました。登る山の名前はもちろ

んのこと、どのあたりに行くのか
すからお勉強しないまま、ただただ
連れられて行かれるままに、のほ
ほんに参加したのでした。

朝四時に大分を出て、車三台で
山口へ。最初に連れて行かれたの
は花尾山です。深木富士と呼ばれ
地元の小学生も遠足に来る山のよ
うでした。美祢から於福というと
ころを経て、荒れた林道に入って
登山口へ。「一時間かからんや
ろ」という飯田さんの言葉を信じ
て杉林の中を二〇分で稜線に出ま
した。樹林が切れ、広い稜線。

「まむしに注意」の木の標識に下
キリッ。「もう今頃は土ん中じ
や」の声に安心して登る。稜線に
出たところから約三〇分、刈り込
みすぎるほど手入れされた急登を
詰めると、芝生の広場のような山
頂に出ます。

(花尾山山頂)



三六〇度のパノラマが見事でした。

三〇〇度ほどは海が見えます。青
い日本海です。山頂には二つの石
造の祠が祀られており、それぞれ
にりっぱな基壇がありました。一
方は「蔵王権現」もうひとつの方
には「文応元年申之四月深木村大
宮司」と刻まれているのが読めま
した。

お天気がよかつたのでお昼
寝がしたくなるようなのかな山
頂でした。下りは三〇分！お手軽
にすばらしいパノラマを見ること
のできる山でした。

次は一位ヶ岳、別名豊田富士ま
たは長州富士。椎ノ木の登山口が
ちょうどお昼で、ここでランチタ
イム。「これも一時間で登れるや
らう」飯田さんのうれしい言葉に
「今回は楽勝！」とビールを飲み
干して登り始めました。冬イチゴ
の隙間のような道を楽勝かと思
いきや、峠について稜線にさしかか
ったとたんにもものすごい急登の
出現。遠江さんは「アキレス腱が
伸びっぱなし！」と悲鳴を上げる。

急登に次ぐ急登、峠から三〇分
登り始めて約一時間で山頂到着。
この山頂の広いこと広いこと！ド
ッジボールでもできそうな広さで
した。

ここも三方が海の見えるすばら
しい眺めの山です。先ほど登った
花尾山もよく見えます。花尾山も
この山も、誰も登山者はいません
に一人出会いました。

さて下り、小学生が遠足に來
るはずなのに転げ落ちそうな急斜

面の上直下です。転ばぬ先のス
トックでなんとかクリア！下りは
三〇分でした。



(一位ヶ岳山頂)

さて、日曜日「登り一時間」
と言ってくれるものと信じていた
ら、「縦走するので八時間ぐら
いかな」え！そんなはずではなかつ
た！

鬼ヶ城は小屋のわきの林道から
歩き始め約一時間で市民が建てた
という、「鬼小屋」に着きます。
立派な丸木小屋でした。ここまで
はよく手入れされた登山道でした
が、ここからは、道は広いので
がまた急登！どうしてこんなに似
た登山道なのでしょう！と、思っ
たら山頂がこれまた広場の展望台
でした。関門海峡が間近に見え、
北九州市街地や周防灘、反対側は
日本海。鬼ヶ城の名前の割には
い所でした！

ここから竜王に向かって縦走です。
安部先生はここから引き返して、
竜王の登山口に車を回すことに。
……、他のメンバーはいざ出発
……、ところが出発したとた
ん、道はまっすぐに落ちていきま
す。目の前の山がぐんぐん高くな
ります。まっさかさま三〇〇メー
トルほど下りました。谷底まで降
りたら、今度はまっすぐに伸びた
急登で、「アキレス腱が伸びっぱ
なし」の足の置き場も困るような
壁を登るような急登でした。

ひたすら同じようなところを登
りながら「芸がない」だの「考え
てルートを作れ」だの文句たらた
ら、汗たらたら、夕べのビールは
すっかり抜けてしまいました。登
りついたら四七四メートルの「広
瀬コブ」まさに「コブ」！憎たら

しいコブでした。
またまっすぐに落ちていくよ
うな下りと、壁のような登りに半
ば腹を立てながら、到着した岩の
上のピークは汐見岩と名前が付い
ていました。彼方に日本海と周防
灘が見えました。

次のコブが竜王です。まだ遠く、
高く見えるのに、また急な下りで
す。もう書くのもいやになるよう
な急な下りと、まっすぐに急な登
りをくりかえして、やっと山頂に
つきました。

縦走路はひっそりとしていたの
に、突然の人並みに驚いてしま
いました。団体さんが何組もいま
した。



(鬼ヶ城山頂)

縦走さえしなければ二時間足ら
ずで楽しい山行でしょうが、「二
度と歩きたくない縦走路」とぼや
きながら歩いた私たちはくたくた
でした。でも、ビールの味はだれ

よりもおいしかったのでした。
鬼ヶ城登山口から童王山頂まで約四時間半かかりました。車を回して吉見から登ってくる安部先生を待って、みんなで温かいうどんを食べて下山。下りも、上官まではなだらかな稜線道でしたが、中



花尾山着10:00発10:23〜登山口着10:55
一位が岳登山口発2:28〜鞍部13:10〜一位が岳着13:25発13:35〜鞍部14:50〜登山口着14:30
一二月九日(日)

くるみ小屋発6:52〜鬼小屋7:55〜鬼ヶ城着8:15発8:30〜広瀬コブ着9:25発9:35〜汐見岩着9:47発9:53〜吉見峠10:20〜童王山着11:33発12:50〜上官13:20〜吉見登山口着14:05

くるみ小屋



シリーズ

支部の先達と語る④

宮まではかなり長い急な下りでした。
六〇メートルと侮る無かれ！
こんなしんどい六〇メートルは初めてでした。鬼ヶ城と童王は縦走しないと醍醐味は味わえませんが！一度は行ってみてください。その際に私は誘わないでくださいネ！

参加者：安部、飯田、久保、遠江、西(あ)

コースタイム

一二月八日(土)

花尾山登山口発9:13〜稜線9:35〜

今回は支部報創刊四〇号記念として、支部創立に尽力した、初代支部長の永井清一氏(1899〜1972)の公同番号43200)について紹介します。

永井氏は大正八年に別府で山登りの好きな同人を集めて、「わらじ会」(のち昭和三年に二豊山岳会に改称)をつくるなど、戦前の

九州登山界の草分け的存在の一人

でした。戦後、二豊山岳会の会長や県山岳連盟の役員をつとめ、三〇年に日本山岳会に入会して、三五年に大分支部(現東九州支部)結成の中心となり、初代支部長をつとめました。この間、県内はもとより、九州の山々や日本アルプス、富士、丹沢、飯豊朝日連峰全国に足跡を残しています。また、昭和三七年には大分県自然保護協会を組織して会長に就任していきま

す。四〇年に東京に転居で支部から去って、五二年に病死しています。氏の思い出について、創立二〇周年記念誌に載せられた、同じく故人の本木善重氏の『物故会員追悼文』を転載させて頂きました。

(故永井清一氏)



「支部の創始者」

永井清一氏の思い出

の思い出

故本木善重

私と永井さんとの出会いは昭和二二年ごろだったと思う。氏は当時、二豊山岳会の会長であり、別府市体育協会の登山部長だった。もちろん大分県の登山界の大先輩で、その温厚篤実な人柄はだれからも愛されていた。

その後、氏とは山行や会合で接することが多く、逐年親交を重ねていったが、山を心の故郷とし、大自然を神とたたえ、登山を至高のスポーツと見る同氏には共鳴し、畏敬することが多かった。

共にした山行は多かったが、とりわけ印象に残っているのは、昭和二九年夏、槍ノ穂高を縦走したときと、その後、上椎葉から五箇荘に入り人吉から霧島へと回ったときである。老齢にもめげぬ同氏の健脚には、さすがに大先輩だと感心したものである。

〈永井氏の略歴〉

永井氏は特に歴史や自然保護に関心が深かった。昭和三七年、鶴見岳の頂上に自費で火男火売神社の奥宮祠を寄進したほか、頂上避難小屋の復元、由布・鶴見山群の標高柱や指導標の整備にも力を入れた。自然保護協会の運動に参加、大分県自然愛護会も結成した。山好きだった当時の県知事を二豊山岳会の名誉会長に引っぱり出したのも、大分県の登山熱を高め、同時に自然と自然保護に人々の目を向けさせようという氏のねらいだった。

後輩の指導にも熱心だった。最初に書いたように、氏は登山を至

今秋の登山

安部可人

畑仕事や太刀魚、鯛釣りのシーズン。その合間を縫って登山再開。平日、晴天初めての山、初めてのルートに限定。

十月三日、独り。黒猪鹿ルートで万年山へ。帰りは小倉岳、三十分。まだ暑い。

十月十九日、独り。スキー場の右、シヤクナゲ谷から、北北西に張り出す尾根ルートに合流、十四分で狛師山。帰りは湯平の大久保山(丸太の急段)

十月二十四日、独り。五ヶ所小から入り、林道を五十分歩いて、栗原越え登山口。猛烈なスズタケコンパス活用。二時間かけて、やっと赤川浦岳(三等)着。

十月三十一日、十一月一日、独り。川ノ口から林道を十四分で終点(1095m)。杉林を五十分、一五四m点。初めて急登、十八分、地図の村の字の上のピーク着。手

入れされた気持ちのよい稜線、四十分で馬口岳(なし)。バクチ岩からの眺望は絶景。黒岳の広場で車中泊。怖い。翌朝、黒ダキ社まで二十五分散歩。三十分の急登で黒岳(三等)。カゴダキへ周回して

下山。紅葉、地元の手入れ、安全なミニサイズの山域に満足。帰りは、紅葉の六峰街道、途中、二上山男岳(なし)へ三十分。

十一月九日、十日、河野広作同
十一月二十五日

行。甘茶谷林道終点。樹林の中、いきなりの急登、六十分、我慢。念願の尾鈴山(二等)へ。快適なシヤクナゲ縦走路。長崎尾の次のピークを左へ。長いゆるやかな尾根(ミヤマキシミ)を林道へ。キャンプ地泊。翌日も快晴。矢研の滝。移動。次は木軌道跡、四・五キロ、丁度二時間で壮観の白滝。よく歩いたものだ。

会員所属の山のクラブの紹介コーナー (No.6)

「高登研」

後藤利雄 (12505)

1965年(昭和40年)全国高等学校総合体育大会(高校総体)が祖母・傾、九重山系久住で実施され成功裡に終了したが、この力を結集してさらなる登山技術の向上を願って、顧問の間から高校教職員で登山グループを結成することとなった。

- 名称 大分県高等学校登山研究会(略称:高登研)
- 1. 創立 1966年(昭和41年)3月20日
- 2. 会長 初代 大津省吾(事務局長・大山博範) 二代 勝男和男(〃・首藤宏史)
三代 金丸寿雄(〃・山本修) 四代 首藤宏史(〃・安部可人).....
- 現在 安野豊治(〃・山口耕平)

3. 会員数 発会当時は70名 現在は約30名。
高体連登山部の顧問は即会員となったが、現在は登山部員の減少等で少なくなっている。岳連に多くの会員が役員になり、特に国体準備のため多数の会員が活躍している。

4. あゆみ
初期の頃 登山技術の向上を目指し、夏は日本アルプス合宿、秋は阿蘇・鷲ガ峰で岩登りの研修、冬は伯耆大山でスキー合宿、また家族登山会も定例行事。県岳連の研修等に参加し、沢登りも実施した。高体連登山部の顧問が多いので、高体連登山部の育成、県教育委員会の野外活動指導者講習会に講師として協力・テキストの編集にも参加した。

- 1970年代より海外登山へと
- 1970年8月 台湾の雪山 大山博範、朝山迪彦、山本修、首藤宏史
- 1985年8月 スイスアルプス 金丸寿雄、安部可人、宇野公是、是永保孝
- 1988年8月 台湾の玉山 金丸寿雄、佐藤亨司、首藤宏史

交代期 岩登り、海外登山と高体連の各校の夏のアルプス合宿、冬の大山をはじめとする雪山合宿の実施、岳連の研修等の参加

- 1985年 岳連、二次チベット・ヒマラヤ(ニンチカンサ峰) 原勇人、佐藤正八
- 1994年 日中友好(党河南山) 佐藤正八、赤嶺和樹
- 1996年 マッターホルン・モンブラン等 原勇人、赤嶺和樹、坂本裕昭、石川明德、合澤哲郎、森薫
- 2000年 ムスターグ・アタ南峰(7546m) 原勇人、石川明德、山本悟吏ほか4名
その他、県岳連の遠征隊として、また個人としての海外登山に参加して活躍している。

(付記) 会員の勝男和男先生の呼びかけで全国高体連結成大会が開催された。
会員(登山部顧問)はまだ登山大会も審査がなく、自由だったから、木浦鉱山、大切峠、藤河内、喜平越、大崩山のルートで実施することもあった。

(日) 月例登山参加。熊ヶ岳、狩場山、赤根山。

十一月三十日、独り。今年、会報、三十八号の飯田無名山ガイド、里山の稜線歩き、中尾山(四等)二十分、三十九号の善法寺山(四等、仮称)四十分、次に三十八号の荒平山(三等)五十分。暗い樹林の三山、里山の紅葉に満足。もう風がつめたい。



私の無名山ガイドブック2022

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その3)

杵築市山香町の立石峠の近くにある三角点のピークを二ツ訪ねてみよう。

向野城山 (100.9m)

向野の津波戸山の登り口の反対側の小ピークである。大分百山のガイドブックにある、国道一〇号線から津波戸山へ入る道の、JR新立石トンネルの入口の上の三又路がこのピークの登り口となる。

この三又路には「津波戸山登山口」の標識がある。

三又路のすぐ右手にガードレールがあるが、その直前のブッシュの少し薄いところを分け入ると、ヒノキ林の中に山道がある。

この道は谷沿いに南に続いているが、やがて林の中に判然としなくなる。だから、林に入ってから一〇〇mほどで右上の稜線を目指すが良い。右(西)が照葉樹の二次林、左がヒノキの植林地で、その植生境の急斜面を直登していくと、入り口から二〇分ほどで大きなシイの木が、文字通り林立する小ピークに達する。見事なシイの木である。

すぐ下をJRの線路が通り、列車の通過する音や、国道一〇号線のエンジンの音、近くの民家の鶏の鳴き声などが聞こえ、里山の雰囲気を感じさせる。この地点が山頂から派生した稜線の西の肩で、ここから左(南)に向きをかえて登っていく。

シイやカシ、タブといった照葉樹の中の緩斜面は、岩が露出していて楽しい登りである。次第に急な登りとなり、やがてマダケが見えてきたら山頂が近い。

ほどなく三角点が見え山頂で、北側はヒノキの植林地、南側は照葉樹の天然林で、その中に下の方から山頂の近くまでマダケが進入してきている。四等三角点は天然林の中のわずかに切り開かれた空間の中にある。



このピークから東は、緩くアップダウンしながら立石峠の方まで続いている。城山という名前があるから、中世の山城の跡だと思われるが、丸い山頂にはそれをしるはせるものは見あたらない。



立石峠南のピーク (322.9m)

立石峠の南にあるピークである。このピークへは、立石峠からのヤブこぎはちよつと手間取るし、楽

しくはない。立石から山浦に通じる県道を行くと、約二キロで定野尾に抜ける道がある。これを入ると同じく約二キロで、谷間に突然右手に水田が広がり、民家が見えてくる。この民家の入り口が四叉路で、左は出河内に通じる。この民家の脇を登山口としよう。

コンクリート舗装の林道が奥に続いているが、入り口にゲートがあり、近くの道路脇に車を止めて歩くのがよい。数分で舗装が切れて、さらに数分で草深く荒れた林道の終点につく。ここから先は道はないので、谷沿いにスギの造林地に踏み込み、右手に見える稜線に向かって斜めに登るのがよい。

稜線の手前からアセビやヒシヤカキなどの低木の二次林となる。緩い稜線を登っていくと、林道終点から十数分で、右から登ってきた古い作業道と思われる道跡に出会う。このあたりから傾斜は次第に急になり、木立もリョブやクヌギ、ナラ、シロダモなどの高木の林となる。

標高の低いこの辺りの山々は、全山スギかヒノキの人工林であるが、意外なほど野趣の残る稜線である。心地よい気分が登ると、さらに傾斜が急になると、松などの低木の軽いブッシュを分けながら急登していくと、林道の終点から三十数分で三角点のあるピークに達する。明るい疎林の中に三等三角点があり、その横には中に何も無い空の石の祠がひっそりと置かれている。



下りは、方向を間違えたらとんでもないところに降りてしまうほど、間違えやすいので、登りながら目印を忘れないことだ。



参考コースタイム

- ・津波戸山標識〜三五分〜向野城山〜二〇分〜津波戸山標識
- ・林道ゲート〜一〇分〜林道終点〜三〇分〜三角点〜二五〇分〜林道終点〜一〇分〜林道ゲート

叙勲の受章おめでと うございます

昨年秋の叙勲で安藤幹さんが、長年の警察業務における功績が認められて、瑞宝小綬章を受けられました。編集部で喜びの声をインタビューしましたので報告します。

安藤幹さん

平成一九年の秋の叙勲に際し、はからずも瑞宝小綬章の栄に浴し、身に余る光栄と深く感謝しています。これも皆様の長年に亘るご指導とご鞭撻のおかげで衷心よりお礼を申し上げます。

昨年十一月九日、グラントアーク半蔵門において国家公安委員長から勲記・勲章の伝達を受け、引き続き家内同伴で皇居に参内し春風の間に於いて天皇陛下に拝謁、陛下からねぎらいと励ましのお言葉をいただき、感激の極みでありました。この感激は私たち夫婦にとり生涯忘れることのできない思い出となりました。

今後はこの栄誉に恥しないよう精進してまいります。

十二月十五日、湯布院で開かれた支部の忘年会では皆様方の盛大な祝福をいただきました。山登りとは直接関係のないことで受けた叙勲ではありませんが、支部の皆様の大らかな祝福に感激し、深く感謝します。また今後とも、どうかよろしくお願いいたします。

お知らせ



二月月例山行の ご案内

- ・二月二四日(日)
- ・目的地：震岳(ゆるぎだけ)(鹿本富士・かもとふじ)(肥後小富士・ひごこふじ)(416.3m)(熊本県・山鹿市)、高畑山(たかはたやま)(河原富士・かわはらふじ)(肥後の小富士・ひごこのふじ)(766m)(熊本県・西原村)
- ・出 発：二月二四日(日)午前四時サニー出発
- ・山鹿市国道三号線日輪寺入り口へ八時集合

三月月例山行の ご案内

- ・月 日：三月九日(日)
- ・目的地：小富士山(こふじさん)(小富士山・こふじさん)(600m)(豊後大野市)
- ・出 発：三月九日(日)午前六時サニー出発

四月月例山行の ご案内

- ・月 日：四月二〇日(日)
- ・目的地：屋山(ややま)(高田富士・たかだふじ)(643.0m)(豊後高田市)尻付山(しりつきやま)(大岩屋富士・おおいわやふじ)(687.5m)(豊後高田市)
- ・出 発：午前六時サニー出発
- ・現地集合：豊後高田市立都甲小学校前へ七時半集合

※ 月例山行の日程等が四月の定例総会資料の記載と変わっています。ご注意ください。

平成二〇年度支部 定例総会の予定

- ・日時：四月二日(土)
- ・受付 午後六時より
- ・開会 午後六時三〇分より
- ・場所：大分市府内町「コンパルホール・視聴覚室」
- ・会員、会友の多数の参加をお願いいたします。

支部役員会の開催について

- ・日時：三月六日(木)
- ・午後六時より
- ・場所：大分市府内町「コンパルホール」
- ・支部定例総会議題・ほか

・各役員の方は、あらかじめ予定しておき、必ず出席して下さい。

※ 会費納入のお願い

本部会費(正会員)・支部会費(会員、会友)の入金していない方は至急納入して下さい。また、会友で脱退の方は必ず申し出て下さい。

後記

- 耶馬溪の聡見山に先日、広作と登山。その東に扇山(630m)あり、そこに長岩城があったそう。初代守護の宇都宮信房の次男、野中重房が築城という。
- 宇都宮鎮房は秀吉の怒りを行い、中津城の黒田孝高に謀殺され、断絶、廃城。
- 家臣達が宿舎の白壁を血にそめ討ち死にしたのが現在の赤壁の合元寺。(大分県の歴史散歩)から
- 正月に元越山に登山。驚くべき健脚の国木田独歩。その処女作「源叔父」(1883)探して読んでみたい。(安部)
- 隠れ名山の近くの山を登っているが、十八年は大分県の百山以外の山を二三〇座近く、十九年も二〇〇座以上登らせてもらった。
- 山岳部も農村部も時代の波に呑み込まれて荒れ果ててきていて、その大地を守る人々は高齢化が進み、臨界集落が増えているのが実感できます。
- 山岳や農村で生活する人々は、古い文化と新しい文明と折り合いをつけながら生きています。若い人々は都会に憧れ、時代の波に乗ってでていってしまう・・・。(中野)
- 三九号は一ヶ月お遅れの発行になってしまいました。編集作業の怠慢を反省しました。
- そこで今回は定日発行を念頭に置いて作業を行いました。また遅れてしまいました。「すみません」
- 「すみません」と頭を下げる姿がやたらと多いこのごろ。二〇〇七年を表す「今年の漢字」は「偽」でした。一緒にされるのはいささか心外ですが・・・、やはり「すみません」
- 暖冬の今年も、九州の雪山は期待できそうにありません。深い雪を分けて歩いた昔が懐かしいです。
- でもそれなりの冬山のお便りをお待ちしています。皆さんの投稿が頼りの編集局です。(K・I)

ニニは何処?



支部報バックナンバー

創刊号(10年1月20日)	第4号(10年12月1日)	第5号(11年4月17日)	第6号(11年7月31日)	第7号(11年10月31日)	第8号(12年1月25日)	第9号(12年4月25日)	第10号(12年7月25日)	第11号(12年10月30日)	第12号(13年1月30日)
新しい年の新しい会報 南米ペルー・エクアドルの山 石堂山から樋口山へ 霧島山縦走 小表山・柏山へ 屋久島紀行 夏休み利用の山行 支部臨時総会を開催 祖母紀行 池代に憩う 2月月例山行のお知らせ 九州4支部の集い 後記	別府湾リレー登山 鶴見岳山頂でフィナーレ 小麓山から鶴見岳へ 十文字原から鶴見岳 無風 快晴4.0 扇山と祇園山へ 渡神岳外二山 貫山と足立山へ 斉藤会長が来県 傾山へ 第15回全国支部 懇談会報告	ピア色の秘境 お知らせ 後記 玉山(YUSAN) 登攀 『母那覇岳』登山 故釘宮登氏追悼登山 樺木山から御所峠へ 登山と地球環境 印象に残った山の本 年次晩餐会病 支部事務局担当者会議 5月月例山行のお知らせ 後記	九州学問の旅 第八回今西祭報告 支部定期総会報告 五月の涸沢 モンブラン登山 釣鐘山 御所峠から九六位山へ 夜明城から鶴ガ城へ 年次晩餐会病(二) 後記	四〇周年記念誌原稿募集 お知らせ 後記 後立山を歩く 千灯岳 文殊山、両子山 走水峠から横岳へ 泊めぬ宿 映画のご案内 四〇周年記念誌原稿募集 お知らせ 後記	2000年を迎えて ふるさと名山探訪 鰯山、吉武山、野稲山 祖母へ傾縦走(1) 二度あることは三度ッ ミレニアム記念登山 私の無名山ガイドブック① 平成十一年度年次晩餐会 お知らせ 役員会からのお知らせ お知らせ 後記	支部定期総会報告 田原山登山口から十文字原 若杉山、鬼岩谷山、砥石山 山登りに新学説? メンソーレ石垣 珍珠・九重の山々 事務局担当者会議 祖母へ傾縦走② 私の無名山ガイドブック② 人のいないアルプスを お知らせ	涌蓋山頂で万歳 雷山、井原山 甫与志岳、稲尾岳 大野岳、烏帽子岳、金峰山 西穂から奥穂高 ニュージューランド山旅 ロッキーマウンテン横断ベスト ハイキングの九日間 私の無名山ガイドブック③ お知らせ 後記	第17回全国支部懇談会 2000年九重集 山で唄う歌 チロル&ロミテ ドアルプスハイキング 梅里雪山の麓を行く 故郷の山を想う 帰りを待つのは: 浮岳から雲仙普賢岳 日南地方の宮崎百山へ お知らせ 後記	重広さんと珍珠富士へ 2000年忘年会筋湯で 倉岳そして鞍岳 風師山、戸上山、足立山 三国国境稜線の山旅 故郷の山を想う(II) 帰りを待つのは:(II) 私の無名山ガイドブック④ おすすり映画 お知らせ 後記
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9

この写真は何処から何処を撮ったものでしょう?
お分かりの方は事務局まで
はがきでお知らせ下さい。当た
った方には記念品をさし上げま
す。(二名までで、正解多数の
場合は抽選します。)

締め切り一二月三二日
前回の正解は大船山頂から御
池の向岸を撮ったものでした。

第13号(13年4月25日)	1	名山をたずねて	8	岐阜支部30周年記念式典	3	地蔵岳	6	厳冬期の北海道登山?
白髪岳へ	2	私の無名山ガイドブック⑦	8	後立山縦走記②	4	山行報告(高限山系)	6	私の無名山ガイドブック⑯
俵山へ	2	お知らせ	9	四姑娘山トレッキング④	4	内山へ練習登山	7	年次晩餐会報告
仰烏帽子岳、六本杉山	3	後記	9	私の無名山ガイドブック⑩	5	私の無名山ガイドブック⑬	8	お知らせ
冠嶽、金峰山	4	第16号(14年1月25日)	1	木本博さんを偲んで	6	15年度支部定例総会	8	後記
今度のテーマは分水嶺	4	支部忘年会	1	お知らせ	7	お知らせ	8	第25号(16年4月25日)
平成12年度登山記録	4	分水嶺・黒岳	1	後記	7	ご連絡	6	大根地山から冷水峠へ
私の無名山ガイドブック⑤	5	秘技「やぶごぎ体操」	2	第19号(14年10月25日)	7	後記	6	平家山・カルト山
2001年度支部総会終わる	6	山行報告 富士山	3	鷹ノ素から三陀山へ	1	後記	6	白鳥山・銚子笠
総会の返信より	7	山行報告 富士山	4	倉木山	2	第22号(15年7月25日)	1	時雨岳へ
お知らせ	7	白峰三山山行記録②	5	伊美山・黒木山	3	第2回青少年体験登山	1	星岳と高場山
お知らせ	8	四姑娘山トレッキング②	6	山行報告(南八ヶ岳)	4	鳴子山へ	3	私の無名山ガイドブック⑰
後記	8	私の40周年記念山行③	6	晩夏の山旅	4	市房山・江代山	3	支部定例総会報告
第14号(13年7月25日)	8	後立山連峰①	7	山男擬き	5	山行報告(九重嵐山縦走)	4	中央分水嶺踏査計画
重廣さんと登る	1	利尻山・礼文島	8	四姑娘山トレッキング⑤	5	足腰が衰えても登れる山	5	お知らせ
国見岳、五勇山	3	私の無名山ガイドブック⑧	9	夏休み登山	6	私の無名山ガイドブック⑭	6	後記
国見岳後日談	4	13年度登山記録	9	私の無名山ガイドブック⑩	7	お知らせ	7	第26号(16年7月25日)
男鈴山、女鈴山	4	年次晩餐会報告	10	青少年体験登山実施計画	8	後記	7	ナガミズ山・
ふるさと富士ファイナル	5	お知らせ	10	お知らせ	8	後記	7	フキクサ山・合鴨山
私の無名山ガイドブック⑥	7	第17号(14年4月25日)	1	青少年体験登山大会	1	第23号(15年10月25日)	1	上塚山からガラムキ峠へ
私の40周年記念山行	7	大分百山発刊によせて	1	仏来山・国見山・所小野山	2	平山会長歓迎会	3	野平の峠から高堂台へ
アルパータ：トレッキング	7	支部定例総会報告	2	上塚山から岳滅鬼山へ	2	妻子ガ鼻・南外輪山	4	利尻山と北海道
市房山への道	7	本谷山、笠松山	2	霧の馬子岳	3	蛇越岳・立石山	6	今春の登山
船通山	7	可愛岳	3	障子岳・釈迦岳・大日岳	4	黒岳・黒木山・珍珠山	6	私の無名山ガイドブック⑱
安平路山は遠かった	8	青野山、十種ヶ峰	4	一万円です・テント場代	5	竜ガ鼻	7	今西錦司レリーフを尋ねて
おススメ映画	9	雨乞岳から倉木山	5	山行報告・阿蘇鷲ガ峰	6	紅葉の鹿納山	7	お知らせ
お知らせ	9	久しぶりのハードな雪山	5	私の無名山ガイドブック⑫	7	私の無名山ガイドブック⑬	8	後記
後記	9	久しぶりのハードな雪山	7	平成14年登山記録	8	お知らせ	8	第27号(16年10月25日)
第15号(13年10月25日)	1	南アルプス北部縦走	8	14年次晩餐会	8	後記	7	平山会長をお迎えして
中国山地、寂地山	2	四姑娘山トレッキング③	8	九州五支部集會報告	9	後記	7	野稲岳へ
三方岳	3	私の無名山ガイドブック⑨	9	九州五支部集會報告	9	後記	7	水分峠付近
剣山	4	総会の返信より	10	お知らせ	10	後記	7	大石峠から一尺八寸山へ
雪降山、天包山	4	おススメ映画	10	後記	10	後記	7	隊列登山に考える
懐かしい大菩薩：八甲田山	5	お知らせ	11	山高きが故に	1	第24号(16年1月25日)	1	平成15年登山記録
白峰三山山行記録①	5	後記	11	山高きが故に	2	大分県岳滅鬼峠(重廣)	2	私の無名山ガイドブック⑲
四姑娘山トレッキング①	6	第18号(14年7月25日)	1	黒岳	3	向坂山・三方山往復縦走	3	お知らせ
私の40周年記念山行②	7	石山・米神山へ	2	二ツ岳	3	峠トレッキングと忘年会	4	後記
夏でも寒い：御嶽山	7	奥天井、巢石山を歩く	2	二ツ岳	3	時山・雪の中を歩く	4	後記
						九州地区5支部懇談会報告	5	

第28号(17年1月25日)	津江山系の山々	1	お知らせ	1	今西錦司⑥	8	私の無名山ガイドブック⑧	1	アルバム	8
	雨男 晴れ男	3	後記	1	定例総会の主なこと	9	お知らせ	0	おわりに	9
	立羽田から中の原山へ	3	第31号(17年10月25日)	1	後記	0	第37号(19年4月25日)	1	第39号(19年10月25日)	1
	内匠の池から鹿倉の峠へ	4	百々山・恐羅漢山・・・	1	後記	8	九州5支部懇談会報告	1	第六回青少年体験登山大会	1
	第3回青少年体験登山大会	4	百年前の大分・登山界	2	喜寿のお祝い登山	1	筑豊の山々	2	矢筈岳(姫島富士)	3
	平成16年登山記録	5	新百姓山へ	4	第34号(18年7月25日)	0	大仁田山・諸塚山など	1	赤星山(伊予小富士)	3
	マリン・マウンテン・マウンテン①	6	内山へ	5	釈迦岳・御前岳	1	元猿山など	2	月出山岳(日田富士)	4
	平成16年度年次晩餐会	7	韓国山岳会との交流	6	三子山・安蔵寺山	3	先達を語る①「加藤数功氏」	2	先達を語る③「工藤元平氏」	5
	碓氷峠	8	橋本祥案さん卒寿祝福登山	7	私の無名山ガイドブック②⑤	4	クラブ紹介③「岳重会」	4	白峰三山	6
	今西錦司①	8	百周年記念登山	7	今西錦司⑦	5	皿内の城山	5	クラブ紹介⑤「二豊山岳会」	7
	私の無名山ガイドブック②⑩	9	マリン・マウンテン・マウンテン④	8	お知らせ	6	全国支部集会報告	8	七月の山行	8
	おすすめ映画	9	私の無名山ガイドブック④	9	後記	7	私の無名山ガイドブック⑥	8	私の無名山ガイドブック⑩	8
	お知らせ	10	今西錦司④	7	平成17年度会計決算報告書	7	支部定例総会開催	9	お知らせ	1
	後記	11	チベットの7年	8	第35号(18年10月25日)	8	お知らせ	1	後記	1
	第29号(17年4月25日)	11	お知らせ	12	蔚山支部との交流登山会	1	後記	2	第38号(19年7月25日)	2
	定例総会と平治岳	1	後記	12	第5回青少年登山大会	3	韓国山岳会蔚山支部	1	との交流登山	1
	水分峠からカルト山へ	3	第32号(18年1月25日)	1	牛ノ峰と伊予の山々	5	犬鳴山へ	2	由布岳(豊後富士)	2
	木場の峠から鹿倉の峠へ	4	嵐を呼ぶ男再来	1	虎が峰	6	湧蓋山(玖珠富士)	3	琴路岳(能古見富士)	4
	フンザの旅(1)	5	賑やかに忘年会	2	天神原山	7	唐泉山(肥前富士)	5	先達を語る②「野口秋人氏」	5
	対馬13山	5	三宅山へ	2	ドロミテ、チロル、ベルリナ	7	クラブ紹介④「みどり山岳会」	7	今西錦司⑨	8
	マリン・マウンテン・マウンテン②	7	百貫山への旅	3	ツクモ草を見に	7	私の無名山ガイドブック③	8	私の無名山ガイドブック⑩	8
	私の無名山ガイドブック21	8	百合野山	3	北アルプスの報告	8	お知らせ	10	後記	10
	西錦司②	9	マリン・マウンテン・マウンテン⑤	5	私の無名山ガイドブック②⑦	8	お知らせ	11	後記	11
	お知らせ	10	犬鳴山	6	クラブ紹介①「府内山岳会」	9	お知らせ	11	後記	11
	後記	10	私の無名山ガイドブック②④	6	お知らせ	10	お知らせ	11	後記	11
	附録	11	今西錦司⑤	7	第36号(19年1月25日)	1	お知らせ	11	後記	11
	第30号(17年7月25日)	11	お知らせ	8	懐かしのマナスル三山	1	私の無名山ガイドブック⑩	8	後記	11
	平山会長の記念講演	1	後記	10	竜峰山	1	お知らせ	8	後記	11
	百周年記念登山大会	2	第33号(18年4月25日)	1	谷ガ迫山	2	お知らせ	9	後記	11
	ガラメキ峠から所小野山へ	2	鹿嵐山	1	馬糞ガ岳など	3	猪群山	4	韓国山岳会蔚山支部との	1
	犬が岳へ	4	定例総会開催	1	北アルプスの報告①	4	今西錦司⑧	5	交流登山参加報告	1
	北九州5周年記念集会報告	5	古処山・屏山・馬見山	2	今秋の登山	6	嶺南アルプス概念図	6	コースタイム	3
	フンザの旅(2)	6	上福根山・蕨野山	3	今秋の登山	8	参加者名簿	8	ひとくち感想	5
	マリン・マウンテン・マウンテン③	7	マリン・マウンテン・マウンテン⑥	4	クラブ紹介②「大分山の会」	8	ひとくち感想	10		5
	今西錦司の話	9	秋の単独行	6	気になって焼岳	0				
	私の無名山ガイドブック⑩	9	17年度登山記録	7						
	今西錦司③	10	私の無名山ガイドブック24	7						

日本山岳会東九州支部報 第40号

2008年(平成20年)1月25日(金)

発行者 梅木秀徳之

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八